

瀧壺巡り

吉田 真人

世界三大瀑布のうちナイアガラ（米国・カナダ国境）とイグアス（同アルゼンチン・ブラジル）へは行った。アフリカにあるビクトリアは未訪問である。

ナイアガラ訪問は半世紀近く前だ。

バッファローの街から20分程車を北に走らせると、前方に雲のような巨大な水蒸気群が湧き上がっている。そこが瀧の在りかだ。

瀧が落ちる直ぐ横に行つて見る。高さは56^歳で、且つ幅がものすごく広く、対岸が水煙で見えない。圧倒的な水量で、今にも中に吸い込まれそうだ。日本で見たことのある瀧とは較べるべくもない。

瀧が落ちて煙っている水面に船が見える。300人程が乗った観光船で、全員頭から足先まで真っ黒だ。何で黒人専用なのか、白人と黒人は区別して乗船しているのか、と疑問が湧く。エレベーターで乗船場へ行くと疑問は氷解。全員が黒いフード付ゴム合羽を着用しているのだ。全身をすっぽり覆つてもそれなりに濡れる。それも又楽しい。

尚、現在は定員700人の大型双胴船が就航し、合羽もPE製となっている。

イグアスへは10数年前に行った。

なにせ大きく広い。瀧の周囲が公園で、トロツコ列車で移動する。季節によっては300もの瀑布が出現する。昔、この瀧を見た元アメリカ大統領夫人が「マイ プーア ナイアガラ」と言つたのも頷ける。

高さ82m、幅150mのU字型をした最大の瀑布『悪魔の喉笛』で船に乗る。40人乗り程の小さなボートだ。瀧壺への突進が謳い文句で、何とも怖そう。救命胴着を渡され、着替えやタオルはしっかりとPE袋に入れる。さあ出発、瀧壺手前で小休止のカメラタイム、そして突進。バケツというより風呂桶の水を浴びせられたようだ。怖いと想う暇はない、ただ必死に呼吸を確保するのみ。「必ず全身が濡れる」と案内書に書いてある通り、雨合羽などで全く役立たず、頭の中から靴の先までずぶ濡れ。船のスタッフは客が濡れるのを楽しんで、突進を繰り返す。事故が起きないのが不思議なくらいのスリルであった。

(2023年12月28日)